家庭生活に於ける儀礼

篠崎茂穂

一、序言

一九五七年九月十六日のライフ誌によると、少年非行の問題は特に米国のみの問題ではなく、他の多くの国々に於ても両親や政府の役人を困らせている。世界の重要都市に駐在している同誌の記者からの報道を総合して見ると次の事が解る。即ち家庭の伝統が強い所には少年の非行は余りない。別言すれば家庭集団や、地域社会或は国民全体のモーリーズが戦争によつて大きく変化している場合に非行は増大して来ている。例えばロンドンに於ては一九五五年に比較すると一割二分六厘、一九三八年に比べると一割八分五厘の増加となつている。フランスでは少年非行は殆んどない。と云うのはフランス人の言う所によれば、親達は子供が外で遊ぶ事を好まないし、不良にならない様に気を付けているからである。又登校時間が米国に比すれば長いし宿題も多い。非行少年の八割から九割は不和な家庭か又は例えば両親共にアル中であると云うように何か欠点のある家庭の子供であると云うのである。

スペインでは此の夏休中、不良団が此処彼処に起つたが大衆が不良化する迄には到つていない。問題の子供は先づ両親との間

に問題を持つている。

イタリーや独乙でも大体スペインと大差はない。ドイツの Halbstarken はロンドンの Teddy boys の如きもので集団行為はなすが而しそれも近隣に迷惑をかけたり小窃盗を伴く位のものに止まつている。印度は学生の政治的な運動以外には少年非行と云つた類の問題はない。ソ連をも含めて鉄のカーテンの向側に於ては到る所にあると云う。其の理由とする所は貧困な経済状態にもよるが、他面には青少年が家庭と云うよりもむしろ国家の権威を拒否するためで、此の点に就て注意を促される事は新しい法規を設けて少年非行に対して政府が『反社会的分子』と云う焼印を押された者を、或は国外に追放し、或は重労仂の厳罰を与えると同様な所置を取る事にした事であると報じている。

記者は日本の状態を報道して、戦後非行の激増は当局の大きな頭痛の種の一つで、当局は此の結果を見るに到つた事を社会の基本的集団としての家庭の破壊と青年達が民主々義を伝統的親孝行の廃止だと誤解した事にあると云つている。

此の雑誌の同じ年の十一月二十五日発行のものにペンシルベニア大学院社会学部長セリーン教授が彼の専門の犯罪統計から米国の犯罪の問題に就て書き、非行青少年に就て大体次の如く云つている。『都市化は犯罪に影響を与える。即ち犯罪は家庭の協力的な集団から個人的競争的なものえの変化に伴う。』例えばポートリコ人がニューヨークに来たり、南部のニグロがデツロイトへ来ると新しい文化に困惑されて、其の反動の一つの顕れが犯罪となる。一代二代三代と住み着いて落付いて来れば青少年も非行をしなくなる。田舎出の少年に就いても同様の事が云える。この様な呑気な事を云えばハレムギャングに散々苦しめ抜かれている少年の親達に対しては全く冷酷な慰めを云う事になるかも知れないが併し論理性がある。少年非行の問題は大体大都市の貧民街の問題で、彼等は自分の家庭に於て自分の尊厳否存在すら認められない様な者達である。そこで彼等は外に出てギャングを形成して罪を犯すのであつて、決して犯罪者となる素質を持つて生れて来ているのではない。『頭ごなしに叱つたり投獄したり、又集団を解体させたりする強い社会的報復は大して成功していない。最近 N.Y. Youth Board, The Youth Commission of Chicago, The Youth Service Board of Philadelphia 等の諸機関が採用しているアプローチは犯罪に代るものを与えて青少

年を正当に認めてやる事だとしている。』（五九頁）

以上の記事には何も是と云つて注意すべき新しいものは見られないが、それでいて私の注意を引く一つの事は少年の非行と家庭との関係の重大性が重ねて述べられている事である。前述の如くセリーンは移民の家庭も数代のうちに環境に適応して来るので子供達も犯罪を犯さなくなると云う事に問題の論理性を認めている点から、テイーンエイジャーの問題を特に数代に亘る家庭の問題として注意させられ、此の点との関連に於て前と前々号とに紹介した恩師バアサードとボール女史との共著『家庭生活に於ける儀礼』（Ritual in Family Living）を紹介して青少年非行問題の解決の一端の参考になり得たらと希望するものである。

此の書はゼームズ・バアサードとエレノア・ボールとが一九五〇年にペンシルベニア大学出版部から出したものである。此の書の第九章は『家庭の儀礼と家庭の融合』と云うのであるが、著者は此の章の序言に『此の論文が更に善い家庭生活を増進する基礎的な将来の見込みとなる一つのアプローチ（手段）を提議するものと望まれている。』（一八六頁）と書き、それが次の五つの点を中心に本書の中に論及してある事を明らかにしている。

㈠『発行された自叙伝を分析して見ると世界で相当の成功を収めた人々は自分の子供時代の家庭生活を回顧し、其の当時の大切だつた事を思い出そうとする時、大体家庭に於て繰返し行なつた慣例即ち我々が家庭の儀礼と云う行為によつて考える。』（一八六頁）斯く家庭の儀礼の重要性が認められている事。

㈡研究の対象となつた大学生達は家庭の儀礼が社会生活の安定性と適応性とを増大させ、従つて儀礼は協同の精神や几帳面な社会的慣習や他人の権利の尊重等と関連があると書いている事。

㈢儀礼は家庭の文化の大切な要素で、各家庭及び家庭の階層によつて異つている事。

㈣家庭の儀礼は家庭の歴史の中に世代と共に変化して行く事。

㈤だが儀礼の多くは世代を通じて保持されて行つている事。

本書は前述のように研究の対象を大体米国の中流階級以上の有名人や大学の学生の家庭に取つているが、一般に家庭は制度的

に大体類似した発達変遷の過程を辿つているので、此の書の内容は今日の日本の家庭にも共通する多くのものがあると看做してよいであろう。ましてや親子関係を中心とした家庭生活に於て家庭の儀礼と云うものが如何なる役割を果しつつあるか、又それと青少年の不良化と如何なる関連を持つかを研究しようとする場合、此の書は最良の参考書として掲げらるべきであろう。と云うのは著者は『家庭に対する此のアプローチの重要性の確信を数十年前に得てから後、家庭の機能を内部から研究し理解して行く事』となり（八頁）其の結果此のアプローチによる研究が続けられ『如何なる要素が家庭の融和団結に寄与するか』との質問に答える事となつたからである。而も此の重大な要素である協同生活の技術とも云う可き儀礼の重要性は余り考慮されていないのが現実ではあるまいか。故に以下バアサード教授の著書を直接関接に紹介する事が幾分でも参考になればと願うものである。

二、家庭生活に於ける儀礼（Ritual in Family Livir g）

A　家庭儀礼、其の意味と変化性

(a)　儀礼とはなにか

家庭生活を内部的に分析して見ると習慣とでも云う可き生活形態に注意せざるを得なくなる。だがそれは単なる習慣でなく、意識的厳格さ、正しさそして又不可避的とも云うべきものがあり、従つて習慣以上のものとせざるを得なくなる。之を儀礼と言う字で表わし、其の意味と内容とを第二章に次の如く説明している。

儀礼（ritual）と言う言葉は一般には宗教儀式と解されている。近代の人類学者は原始人の文化を研究し、彼等の生活の中に於て儀礼と云うものがその文化にとつて不可避的な重大要素をなしている事を発見している。更に社会学者も此の言葉を多く用いているが、彼等の理解の範囲は区々である。例えばラピール（La Piere）、マッキーバー（Maclver）、ウォラー（Waller）、の如き最近の社会学者は宗教との関係よりも一般社会生活との関連に於てその重要性を認めている。『此の言葉の伝統的用法を無視して、其の本源の意味を見る時、何ら畏敬や神秘等宗教的なものはない。儀礼とは実際何であるかと云えば、組織的な慣例

で社会的な人間の交互動作の一型態であつて次の三つの不変的特徴を持つている。㈠明確に規定されている事柄が為さるべき方法である。儀礼は仕方に於て正確さと精密さとを意味する。㈡厳格さの要素がある。規定された仕方が永く続けば続く程精密さの度合は増大する。そして最後に㈢正しさの観念があつて、それは過去の歴史の過程から出て来ている。即ち規定された仕方が繰返されればされるだけもつと強く承認される事となる。斯くして儀礼は単なる習慣と区別される。』（一六頁）

著者曰く読者は儀礼と宗教儀式とを混同してはならない。例えばクエーカー教徒の礼拝等は儀式であつても儀礼の要素は持たない。此の様な理解を持つ時、儀礼とは一つの社会過程で、人間相互の活動が規定さるべき型と特種な文化内容とを持つものである。故に特に宗教と云う様な人間活動の一面にのみ限定すべきものでなく、社会生活の如何なる面にも発達すべきものである。特に家庭生活に於ては、其処に或る特定の文化内容が存在し家族関係は親密で反復的永続的であるので必然的に儀礼は家庭生活の中核をなすものとして発見さる可きものである。

以上の如くバアサードが此の書の中で規定している儀礼の意味の理解を一層明確にする一助ともなればと思つて以下に少し他の学者の説を附言して置きたい。

宇野円空教授は『宗教学』や社会学大系の『宗教と神話』の中で此の問題を取り上げている。彼は宗教を行動的に把握し、従つて宗教活動には必ずしも神仏と云つた様な超人間的対象を必要としない種々の行動のある事を認め『例えば霊場での修行や家庭での聖日の祝いなどのように』と書いている。（二一六頁）更に宗教的行動の一つであると一般に理解されている儀礼に論及し『また近頃では儀礼的贈答とか訪問とかいうように、これが社会的習慣の形式のみを整えた心のこもらない宗教以外の行動を指すこともある』『大略これらを綜合して見た儀礼は、大体に於て特殊的宗教行動をその体とするのであるが、その他普通に宗教と認められていない行動でも、戒律や律法に規定された日常生活の作法のように、宗教的な儀礼となる場合も少くない。』（二二、三頁）

更に儀礼の成立に関して『個人の習性による特殊な行動形式の固定と、それを権威づける神聖観とに基づくのではあるが、現

実にこれらの形式を社会的に結合して具体化し、また世代をかさねてこれを歴史と伝統の中に集成して行くのは種々なる集団生活に於てである。』（二二六頁）従つて発生的に見ても何等宗教との関係を持たず、個人的、家族的、更に部落、種族等と非宗教的集団生活の中に生み出され、それが次第に宗教的意味と拘束力とを持つに到つたものと解されているようである。

フランスの宗教社会学者エミル・デュルケムも大体同様な理解を持つているようである。彼の『宗教生活の原始形態』（古野清人訳）によれば、宗教は社会的なものであり、儀礼は集団の中から生れて来る事を次の様に書いている。『儀礼とは集団の中でのみ生れ、かかる集団のある心的状態を刺激し維持し、若しくは更新する筈の行動の様式である。』（一四頁）従つて此の様な状況で発生する儀礼が必ずしも宗教的なものではないとするのも当然の帰結であろう、更にデュルケムは吠陀教やユダヤ教等既成の宗教と儀礼との関係に言及し、其の中にも『儀礼を行う個人と追求している目的との間に何ら神が介在することなくして作用する行事がある。…かくの如くに、神をもたない儀礼がある。否神を派生する儀礼さえある。』（五〇—五一）と書き宇野教授と理解を一つにしていると思われる。更に『宗教現象の定義について』と云う論文の中で『信者に信ずべき教義と守るべき儀礼とを規定するのは、それは社会である。しかし 若しも事実かくの如くであるならば、それは儀礼も教義も社会の作品であるからである』と結論付けている。（三三頁）

(b) 現代家庭生活の特徴と儀礼

現代家庭生活の大きな特質は、一般文化と共に急激に変化して行く事である。此の変化の故に、家庭生活の中の儀礼の存在と其の重要性とを見失い勝であるが、此の変化と共に儀礼も亦変化して行かねばならないことに注意が向けられていない点こそ却つて重視されなければならないのである。そこでこの変化の傾向として社会学者が認めている点を次の如く挙げている。㈠宗教的支配から世俗的優越へ。㈡大集団から小集団へ。㈢静的集団から動的集団へ。㈣親中心の家庭から子供中心の家庭へ。㈤共同の家庭イデオロギーから民主的のそれへ。㈥総合的のものから個別化された集団へ。㈦隣組家族より孤立した都市環境へ。

(c) 家庭内の儀礼の変化性と其の範囲

著者は約八十年間に渡る充分なデイタを研究して来たので、其の結論は儀礼の変化性と其の範囲とを確証するに充分であるとしている。斯くして其の結論とする所は、第一に儀礼は此の八十年間存続し決して死滅していないと云う事である。第二に家庭生活に於ける儀礼は大きく世俗化して来ていると云う事である。例えば次のケースをもつて此の点を説明する。

『私の家庭に見る一つの最も強い儀礼はラジオの使用に関するものである。私が子供の時から家にはラジオがあつて、私が記憶する限りに於て家の者は皆同じプログラムを聴いて来た。私と兄とは過去五年間「某家庭」というプログラムを批評してきたが、今猶その儘である。日曜日の夕は六時のロジャー兄弟の劇から聞き出して十一時のニュースで切る事にしている。其の間のプログラムを誰も切り変えない。月曜の夜九時のラックス、ラジオ劇場は両親が必ず聞くもので、彼等の耳が全然聞えなくなるか或は原子爆弾でも落ちない限り変更されることはないであろう。』(二七頁)

此のケースが示す様に、今日の家庭の儀礼は宗教に関するものより世俗的内容のものへと変つて来ているので、現代の家庭生活との関連に於て儀礼を研究しなければならないわけである。

第三は変化の範囲であるが、之は非常に困難な問題である。数に於ては確に増加して来ているが、その理由は特に都市の家庭に於ては生活の改善ということに今迄になく多くの時間が費される様な余裕が出来て来たからである。同時に又生活内容が複雑になつて来たので、心を用いさえすれば家庭全体の者が一緒にやれる事が多くなつて来ている。例えば贈物やカードの交換、或は休日の計画等。

B　今日の青年の家庭に於ける儀礼

『現代の青年は現実的である。彼らは民主的である。彼らは懐疑的である。彼らは生活の些細な事にも敏感である。現在の米国の青年に就いて此の様な表現を耳にするのが常であるが家庭生活の儀礼に就いて彼等はどの様に感じているであろうか。…現代の現実的な青年は儀礼を如何に考えているか。』(五九頁)

此の様な質問を或る都市の大学の国語専門の学生八十六名に答えてもらつた。此の中五十二名は男子、残りは女子学生であつ

た。彼等は十八才から二十三才の青年で、一九三〇年代に各自の家庭で守つて来た儀礼によつて答えたもので、その結果は次の様な事を示している。

(a) 家庭の儀礼の発展と力

学生の答えによれば儀礼は大体に於て二種類に区別され、其の一は伝統的なもので、例えば教会とか休日とかに関し、近隣或は更に広く全米的なものである。と云つても全く家庭的個性を持たないものではない。第二のものは各家庭の特別な状況の中で、家族の者の相互活動の中から自然に生れ出たものである。例えば起床、就寝、食事、週末の暮し方等々である。従つて此の種のものは前者に比すれば比較的に単純である。併し他面に於てはより多様であつて守られる回数も多く、又一層実利的に関連付けられているものもある。それ故に、より変化されることも多いと云う事にもなるわけである。以上の諸点を次のケースをもつて説明しようとしている。

『子供達が未だ小さかつた或る土曜日の午後、父親が職場の近くの店から食品のみやげの袋をさげて帰宅した。家には妻と二人の子供がいた。彼等は其の袋を開け小さい箱に入つていた物を一つ一つ味つて行つた。子供等は大喜び。母親も亦御馳走にありつかつて喜こんだ。併し一番喜こんだのは父親であつた。次の土曜日も同じ事が繰返されたが、今度は特に母親の好きなチョコレートを一ポンド袋の中に入れてきた。此の思いやりは特に楽しい事で、子供達迄が母に対する父親の愛情に気が付いた。次の週には父親は子供達一人一人の為めに堅いキャンデーの小さい箱を入れて来た。此の事は子供達を非常に喜ばせた。そして此の時迄にみやげの型が出来上つてしまつた。以後毎土曜日の午後、母と子供達とは同じ室でテーブルの上に鋏を置いて父親がレデグと云う終点から買物袋を下げて帰つて事るのを待つ事になつた。母親へのチョコレートと子供達への堅いキャンデーは何時も入つていた。併し此のみやげのやり方は最初は家の者を驚ろかす事にあつたので、以後も何時でもその点に注意が払われねばならなかつた。従つて袋の中身のチョコレートとキャンデー以外の物は母と子供達とで大騒ぎをして当つこをしながら楽しんで頂くことになつた。此の土曜日の午後の儀礼は父親が世を去る時迄続いた。……此の儀礼は此の家の他の事にも影響し、例えば

朝食の時に家族の者が皆各自の要求を知らせ合うとか、父親は出来るだけ自分の買物をするとか、贈物をする時当てさせて楽しむとか、其の他色々の事に形を変えていつた。子供達が成人して各自が家庭を持つ様になつても各々の新しい家庭で実行された……。』（六一―六二頁）

学生達の報告にあつた家庭の儀礼の多くは此の種のものであつて、偶然にやつた事が発展し具体化された。と云うのはそれが成功したからである。

(b) 家庭の儀礼による子供の調整

家庭全体が子供には最初の調整者である事に誰も異議はない筈である、それにも拘わらず、思慮ある親を除いて多くの親は子供に取つて此の大切な調整の時代を無為無策の中に過させている。此の幼年期に、如何に又如何なるものによつて調整されて行つているかを親も学者も知るべきである。此の調整の器具こそ正に儀礼である。そして此の器具を更に分析するならば、㈠愛情の表現、例えばキッシングとか贈与物についての儀礼、㈡性教育に関係ある浴場や寝室の儀礼、㈢食卓を中心とした儀礼、㈣病気の応急治療に関し家庭に伝えられている儀礼、㈤余暇利用に関する儀礼、例えば読書に対する関心の養成、㈥休日の儀礼、例えばクリスマスや新年等の祝祭日の儀礼による家族一致の精神、㈦集団的適応に生かされる儀礼、例えば家族の協力を強調し、規律正しさを強調し、正格さ、更に又集団生活に於ける個人の権利を強調する儀礼等である。

以上の様に調整物としての家庭の儀礼は、子供達が幼少の時から大切な家庭集団に対する個人関係の正しい観念を教え込むと同時に子供は自分と家庭との関連を二、三代に亘る関係に於て理解するようになる。此の事は子供に将来自分が家庭に対して持つべき責任を知らしめるのに役立つ。

C 家庭に於ける儀礼の変化

第一次世界大戦以来凡ての事は非常に変化して来た。此の変化が家庭の儀礼に如何に現われているかを見るため前述の如くバアサードは一八八〇年から一九一七年の間に発行された名士百人の自叙伝と、一九一七年から一九四六年に亘る八十六名の大学

生によつてなされた儀礼に就ての報告をデイタとしている。従つて此処に使用しているデイタは経済的にも知識的にも米国人の平均以上の家庭のものである。此のデイタの中に見られる傾向は次の様なものである。

教　育

自叙伝に見られる教育は義務教育以前の事で、少年期は多く家庭で教育を受けている。特別に裕福な家庭では教室を設け家庭教師に教えさせたが一般は、親、祖父母、叔父母等が教育した。『だが教育は個人教育で儀礼は義務的・形式的なものであり又家庭生活の大切なものであつた。多くの子供達が家庭外で教育を受ける様になつた後も両親は容易に今迄の方法を捨て去ろうとはしなかつた。伝統的家庭の教室の儀礼は新しい状況に合う様に変更されて行つた。多くの家庭で夕食後食卓の廻りに坐り、ランプを中に置き、教科書を開き母親は繕物籠を膝におきながら子供の勉強を見てやつた。或る家庭では此の為めに食事の時間に質疑応答のゲームを作り、父親は子供達の勉強の進み具合を監督する事が出来た。』(九一頁)公立学校が発達し、一九五〇年の新教科書には親達が知つている古典的なものはなく、従つて夕食後食卓を囲んでの勉学の儀礼は各自がラジオを聞きながらする勉学に変つてしまつた。そして新しく作られたものは子供達の月々の成績通信簿を親達が見て批評したりほめたりする位のものとなつてしまつた。

読　書

書籍は少なく又高価であつたので、優良書を手に入れて何度も繰返し子供達に読んで聞かせる事が家庭の儀礼の一つとなつた。此の儀礼は今日では幼児が寝る前に母親が読んで聞かせる程度のものとして残つているに過ぎないが、少数の家庭で共に聖書を読む位の事以外は朝夕皆が一室で新聞を読む位の事となつている。

入浴と衣類

土曜日の夕か日曜日の朝の入浴の儀礼は特別の意味を持つていた。今日から思えば昔は想像以上の不便をしのび、両親は幼児を除いて年令の順に毎土曜日の夕方入浴させ、上から下まで洗濯した清潔な衣類に変えさせて就床させ、親達も土曜日の夕か日

曜日の朝に入浴した。之は聖日（日曜日）のため一週間の穢れを洗い浄めて正義の観念を養う事と、年令の順になされる事とに意味があつた。時代の変遷と共に入浴の設備等は非常に改善され、家庭の者は毎日でも、又何時でも入浴出来る様になつた。今でも此の儀礼は可成りの程度で続いており、家庭の秩序や思いやり又常に清潔である可き事を教える意味の儀礼となつている。

家庭の団欒

一九一五年頃迄は家庭の外に楽しみを求める事は困難であつた。本の朗読、家庭音楽会、家庭劇、家庭新聞、其の他各家庭が工夫を凝した娯楽の儀礼があつた。大学生の報告によれば、此の種のものは今尚行われていると云う。何故か。劇なら一家揃つて立派な劇場にでも行けばよいでわないか？ 此の疑問に答えるヒントは、昨今ラジオのプログラムのために日曜日の夜は主として家庭の夕べとなつていると云う事の中にある。週日のプログラムも家庭の者を一緒にする内容のものを持つている。

夜　食

一九一五年頃迄は遅くとも午後九時か十時には子供達は完全に寝た。家庭の者は大体日中は一緒にいて三度の食事を共にした。ところが近頃では朝食から夕食迄顔を合せないと云う者がいる家庭は少くない。夕食後の時間も各自勝手な事をし、ラジオを聞いたり、テレビを見たりで家庭の者が一緒に話し合う様な時がなかなか持てない。其処で就床前幼児を除いた家族の者が台所にでも集つて一寸した夜食をしながら一日の出来事に花を咲かすと云つた様な儀礼が出来て来た。此の儀礼は家庭の者の問題の解決等に役立ち、家庭の一員たる喜びの内に一日の労苦を洗われて床に就くと云う事になる。

皿　洗　い

昔も今も家庭の雑用は多い。一日の終りには母親は家庭の仕事で疲れてしまう。夕食後台所で母親を助けて食事の後片付けをする事は誰れの目にも付き易い事であり而も母親と共に雑談が出来て一挙両得の仕事である。報告の中でも学生達の多くが此の事を喜こんでしている事を書いている。子供の多い家庭では此の仕事を割当にして却つてよい結果を見ていると云う。

犬の散歩

自叙伝を書いた人々の時代は犬の散歩等は余りなかつたらしい。然し今日の家庭生活の状況からは犬の放し飼いは許されない。従つて犬の散歩が必要となる。そして学生の報告の中では此の事が重要な儀礼とされている。単に散歩だけで終らず家族の誰が食事を与えるか、誰が何時洗つてやるか等と云う事があつて、一切は義務的な事となり、犬を中心に儀礼が出来て来て家族の間を結ぶ愛情の絆となる。

贈物の交換

自叙伝を書いた人々はクリスマスや誕生日を贈物交換日としたが、今日の学生は色々な贈答日を作つている。其の上更に旅行や買物の帰りに迄手みやげを持つて帰ると云う様な事もある。『儀礼の変遷に関する研究家の云うところによれば、贈物の贈答は従順のシンボル、又時には贈物によつて自分が或る必要な人に対し親密さを示すシンボルともなる。贈物の交換は此の人達の関係を交互的に御互のものとする。若しそうだとすれば愛情の絆が殆んど無くなり或は又何れかと云えば断続的となつている現代の家庭に於て何故贈物の儀礼交換が斯くも重要であるかが容易に知られるのである。』(九九頁)

家庭の食事

昔の人々は一日三度の食事時は家族にとつては欠くことの出来ない生活の燃料補給の時だと云つたが然し今日は違う。朝食をゆつくり取る暇もなく職場や学校へ飛び出して行く。中食は学校や職場等で取る。恐らく毎日家庭の者が一所に食事が出来るのは夕食位のものであろう。自叙伝を書いた人々は家庭外で食事する事は稀であつた。所が現代の人々は一週一度家族揃つて外で食事を取ると云う儀礼を作り出している家庭も少くない。

地域社会が提供する家庭的儀礼

商業化された娯楽や地域社会の活動は一家族揃つて外に出る機会を多くした。自叙伝を書いた人々の時代には一家揃つて出掛ける事を儀礼としていたのは年に一、二回位のものであつた。併し今日では毎週一回(大体土曜日)映画に行き、デパートで買物し、夕食を共にして帰ると云う事を儀礼としている家庭は多い。母の日、父の日が家庭の儀礼となつている家も多い。

父親対子供の儀礼

昔から子供が父親と共に居る事は特別に喜ばれるものでもなかつたが今日では子供が父親と一緒に居ると云う事は実に困難な事となつている。其処で父親と子供とが一緒になるために特別な儀礼的時間割を作らねばならない事になつている。例えば赤ん坊とは夕食の前か後に、男の子とは何曜日に運動を共にする。或は年に何回か旅行に出掛ける。又女の子とは母親を連れないで買物や映画に行く。或は又父親と子供達とで食事の後片付けをすると云つた様に父親と子供が計画的に行動を共にする儀礼が新らしいものとなつて家庭に作られて来ている。

D　儀礼の階層による相違

社会階層の概念を明白にする事は困難なので多くの批評が残るけれども社会学的には一応階層の存在を現実として認めざるを得ない。バアサードはデイタから少くとも上中下の三階層の存在を無視出来ないと云つている。そして此の目的のためには社会階層を次の様に定義付ける事が最善であろうと云つている。

『社会階層は文化的実在と理解する事が適当である。科学的に理解しようとすれば、其の確認は俗物根性で学問的にやつて見たものとか或は主観的価値評価をしたものとか云うものではなく、人間は各自異つた水準で生活し、仂き、遊び又考えると云う事実の認識である。階層間の違いと云うのは単に経済的或は外見的なものではない。社会的行為即職業、消費癖、教育、話し振り、着物の着具合、人生哲学、娯楽、団体行動、社会的態度、家庭生活等々の全部を包含するものである。』（一〇七―八頁）

著者は第六章に於て以上の意味に於ての各階層内にある儀礼に就て研究しようとするものである。研究のデイタは既に使用して来たケースの記録や七十三の自叙伝や新しい百五十六のケースを出来るだけ各階に均等になる様にし、其の階層別は報告者が各自自分達で決定したものによつたと著者は書いている。

扨儀礼は家の広さ、間取り等と関係が深いので各階層の様子を説明すれば次の様なものである。

下層の家

二室のアパートから六室の家で家族は四人から十三人住んでいる。どの家庭も寝室は一つ以上は持つていない。或るアパートでは一つの寝室が他の家庭と共有になつている。台所も大体同様の状況である。何軒かの家庭が地下室の台所を共同で使用し、或は居間に調理用ストーブを持つていると云うのもある。大きな家では別に食堂を持つている。一つの寝室のある家では、それは屢々両親が小さい子供達と一緒に使用している。若夫婦が同居している時は別に彼等と子供と一緒に寝室を持つている。其の他の子供達は適当に家の何処かで寝る事になつている。

中層の家

此の階層の家庭は三室のアパートから最大は二十二室の家に住んでいる。凡ての家庭では両親は一才未満の子供の場合を除いては自分達だけの寝室をもつていて子供達は凡て寝室で寝る事になつている。同室の者があるにしても同性の兄弟姉妹である。大体の家庭には食堂がある。或る者は台所兼食堂又は居間兼食堂となつている。凡ての家庭には一つ又時には二つの浴室が二階にあつて、三階、一階又は地下室にもう一つある。

上層階層の家

十六から三十の室のある家に住み、食堂がある。幼児期を過ぎた子供は各々自分の室を持つている。又凡ての家が充分な浴室を持つている。此の階層は四つのケースを除いては一人から九人の召使がいる。そして多くは夏の家を持つている。

以上の様な家の状況の下に毎日繰返されている事柄に関する儀礼として、次の様なものが取り上げられている。起床、入浴、朝食、日程の報告、夕食等。以上の中の二、三の内容を紹介する事に止めよう。

起　床

現代アメリカの家庭では誰かが先づ目覚時計で起る事になつているが、下層階級の家では大体父親で、幼児が目覚めて泣き出す前に出掛けなければならない。出掛ける時に母親に目覚時計が渡され、母親が次々と定刻に起してやる。

中層階級では一方の親が先づ目覚時計で起き、時計によつて次々とキッスしたり、歌を歌つてやつたり、見慣れた家族のゲー

ム、或は又ふざけた事をして起してまわる。

上層階級では一人一人が勝手に起るか、又は召使が先づ目覚で起きて約束の時間に次々起してやるが、それは前以つて定めてある通り入口の戸をノックしたり、家内電話で起したり、寝室の窓を閉じたりして起す。此の責任は多く母親が取る。併し高校以上の子供達は目覚を持つていて自分で起きる。

洗面所の使用

中層階級の家庭では殆んど皆一緒に起き而も洗面所が少ないので洗面所儀礼が必要となつて来る。従つて或る程度の規則を設けて誰が最初にどの位の時間使用してよいか、時間を超過した場合如何に罰するか、更に如何なる状況の下に共同に使用し得るか等を定める。

上層階級の女子は大体各自の洗面所を持つているので中層階級の人々の場合の事等を却つて興味を持つて聞きたがる。下層階級の女子は何故そんな事が必要かと驚く。多分彼らには全く無縁である。秘密とか潔癖すぎる事にそんなに手をかける程の重大な家庭的価値を認めなかつたであろう。

朝食に関する儀礼

朝食は今日では、各人が行商人のように勝手に食べて急いで出かける。中層階級の家庭では一般は皆が一緒に起き出すので、先づ母が朝食の用意をして最初に父、次に学校に行く子供達と云う風に家族の者に次々と食事させる。上層では下層の場合に似て各々別々に食べる。併し、普通召使が用意して呉れた物を食堂で食べる。此の階層の場合と同様、中層階級の家庭の者も日曜の朝は平素より遅く正規の食卓で一緒に食事をするし、時には既に別に家庭を持つている子供達の家族や客を招いて一緒に食事する事にしている家庭もある。

以上の事以外に云い置きをする事や夕食に関する儀礼等の事にも言及している。例えば中層上層の家庭では朝食後各自が互に自分達の日程を報せ合う儀礼がある。夕食は一般的に見て一番よく家族の者がそろつて御馳走のある食事が出来る時である。然

し之も階層によつて儀礼は異つて来る。例えば時間的に云つて下層階級では室、食器等の関係で一度には食卓に着けない。中層階級では一緒に食事をするが時間は六時半であるのに、上層では七時か七時半が普通であると云つた具合である。

次に家庭の諸雑事と娯楽に関する儀礼を各層別に研究している。中層階級に於ては組織された多くの家の儀礼があるので、家庭の娯楽は比較的楽に出来るようになつている。家の掃除、買物、皿洗い、食糧の貯蔵、洗髪、自動車や犬の手入れ、庭の手入等、家族が各自一定の仕事を最も適当と思われる様に割当てられてなされる儀礼がある。又娯楽と云う点から見ても、週の一夜を一家揃つて映画見に或は自動車で出掛けたり親戚を訪問したり、更には日曜の夕等揃つてラジオを聞きテレビを見る等の儀礼がある。之も階層によつて異つていて、例えば下層の家庭では一緒に出掛けたりラジオを聞いたりと云う儀礼は実行出来ないのが現状である。

宗教儀礼としては家庭に於ける食前の感謝、家庭の祈り、聖書朗読等と共に、家族の者が家庭外の宗教儀礼にそろつて参加する。此の種の儀礼も他の場合と同様階層により家族の多少によつても非常に異つて来ている。例えば小人数の場合には下層階級の人達も皆そろつて日曜日の礼拝に出席する。併し家族が大勢になるとそれは全く個人的な事になつている。中層上層の家庭の大半は揃つて日曜の朝教会に出席するが、其の時の服装は平常のものでなく、特別な物を着る事が儀礼の中に含まれて来る。命名、結婚、葬式、信徒按手式等の儀礼の中で特に結婚式の如きは階層によつて其の内容を異にする事は言う迄もない。

夏休利用に関する儀礼は、交通の発達や若い人々が以前よりも自由になつて来た事から益々個人的になつて来た。自叙伝を書いた人々の時代には、休暇の儀礼は家庭的なものであつたが、今日に於ては極めて稀である。

家計や小遣いに就ての儀礼の中で中層階級では子供達までが家庭の重要出費例えば他の出費を犠牲にして新しい自動車を買入れる事に対して賛否を問われる事になつているものがある。中、上層階級の子供達は定つた小遣いを貰うが、下層階級の場合はそうでない。彼等が大人になつて定収入を受けるようになれば、食費として家計を助ける事になる。

贈答品の遣り取りの儀礼の盛んなのは中層階級の家庭である。誕生日やクリスマスの時以外の贈物は主として食糧品である。

中層階級の父親に対する贈物は大体に於てネクタイ、ワイシャツ、靴下等と云つた所だがそれは実は子供や妻達が父親の無趣味のために品物の選択に困り果てての結果であると云う。之に反し上層階級の父親の場合には必需品を贈る事は遠慮すべき事になつている。下層階級の場合には誕生日やクリスマスに限定され、誕生日の贈物は小さい子供等に限られている場合が多い。

中層階級の贈物の中で面白く思われるものに、贈り主が宝石店の協力を得て例えば銀製の皿類の一つを先づ贈り次々と同じセットの別のものを贈つて行つて終りに其の人は一つのセットを贈つてもらつた事となるという方式の贈り方である。同様な事が高価な真珠の首飾りの場合にも行われている。

以上の外に遺産やその家庭の歴史的、伝承等に関する儀礼がある。例えば代々の家族の記録のある聖書を伝承するとか、先祖にまつわる珍らしい話を口伝すること等である。此の章の要約の最後に著者が次の如く書いている事に注意を引かれる。

『三階層の諸種の儀礼は本来は経済的基盤による生活様式から起つて来るものであるが、我々の研究の対象となつているものの場合に於ては単に収入に基づいたものではない。此の研究の中層階級の家庭の多くは上層階級の或る家庭よりも経済的には勝つているが、同時に又中層階級の家庭の或るもの、収入は下層階級の或る家庭に相等したものである。或る生活様式のために同じ様な生活様式の家庭同志が交際する事になり、そして其の様式はその様な家庭間の交際の中に保持されて行く事となる。家庭の諸出費は適切な価値と目的との基礎に基いてなされ、各々の階層のシンボルは其のために他の色々な事が犠牲にされる価値があるとされている。儀礼は或る一つの経済的身分の集団からと云うよりも寧ろ一階層の文化から起つて来ているものである。』

（一三四頁）

E　家庭の儀礼と家族的週期

家庭は子供の成長と共に常に次の様な週期を持つて変転して行つている。㈠結婚より出産迄、㈡幼児のある家庭、㈢就学前の子供のある家庭、㈣十代の子供のある家庭、㈤子供を送り出す中心としての家庭、㈥老年期の家庭。此の章は石の様な家庭的週期との関連に於て家庭の儀礼を取り扱つている。

(a) 結婚と出産前の家庭

結婚は家庭の儀礼の新規蒔直しの時で、少くとも三つの過程を包含する。㈠各結婚当事者が儀礼の有るものを放棄するか、保持するかに就いて熟慮する。㈡新婚の夫妻の間の二つの異つた儀礼の調整。㈢新しい家庭の儀礼を作る事。

ケース・スタデーが示すのは、結婚生活の楽しい期待の一つは家庭のいやな旧い慣例を脱ぎ捨てるによい口実を与えて呉れる事である。面接した時多くの者が言うには永い間親達のために耐え忍んで来た家庭の慣習から解放される善い時が結婚であると。斯くして教会出席とか其の他の宗教儀礼が此の時期に無くなつていく。其の他旧式の儀礼は計画的に単純化され或は行われなくなつている。だが其の後時の経過と共に大して抑圧的でもない事が解り、何時の間にか新家庭でも実行される様になつた旧い儀礼が多い。兎に角結婚と共に一時でも今迄の儀礼を廃止し、家庭生活を新規にするのが常である。だが多くの親達は骨折つて儀礼を造り之を永続させて行つて子供達のための良い遺産としてもらいたいと専ら願つている。

『七人家族の我々の家庭では学校や仕事から帰つて来るとすぐにも其の日の出来事を互に語り合い度くて仕方がない。夕食時にはお手伝いが出たり入つたりするので話しが出来ない。そこで小さい子供の頃から毎日夕食後居間に集つて勝手に話し合う事になつていた。成長してからは食卓でなく居間に来てコーヒーを頂く様になつた。こうして家の者が一日中の一番楽しい時を親しく印象深く過す事になつていた。……其の後私は結婚した。家庭の者からの結婚記念の贈物の一つは一揃いの銀製の食器で、その中にはコーヒー茶碗等を置いてもよい大きなお盆があつた。此の思い付きの贈物を私は好きだつた。というのはジョンと私とが夕方新しい居間でしかも一緒にコーヒーを飲みながら一日の出来事を話し合う事が出来ると想像したから。だがその様には実現しなかつた。ジョンは夕食を食べながらコーヒーを飲み、居間に行くと新聞や本を読んで何一つ話そうともしなかつた。私が話しかけようとすればそわ〳〵するので私は週末迄待つて漸く話し合う事が出来た。其の間の一週間と云うものは全く中絶の状態であつた。そして夜何かの手掛りでその日の出来事をジョンに話そうと思いを凝らしたが、夕方になるとこわくなつた。私は何も心からしやべれなかつたしジョンからも聞く事も出来なかつた。―彼は私が室を去る事を好まないしただ默つて其

処に居る事を望んだ。或る夕、私はどうしても話し度い事があつた時、ジョンは一寸だけ本を置いて「お喋りは止めて、少し休ませて呉れたらどうだ！」と云つた。私は結婚している姉の所に行つてジョンの事を話し、もうこれ以上我慢が出来ないと訴えた。ところが姉は、ジョンの様に終日教えている人は家に帰れば当然全く静かな休養を与えて呉れる様な相手を求める事になるのであろうと説明して呉れたが、私は一度もその様な事を考えた事さえなかつた。私は自分達が常にして来た様に物事をしないような人には何か故意な加虐愛的（sadistic）なものがあるものだと考えて来ていた。以来私は自分の儀礼を固守しなくなつたが、自分の話し度いと思う事を週末迄保留しておく事には屢々少なからず欲求不満を感じさせられた事を告白せざるを得ない。」（一三八―九頁）此のケースが示すように新婚の家庭には儀礼の観点から夫婦相互の間に調整の問題がある。又両方の両親達から来た圧力に対する問題がある。更に新家庭に適する儀礼を造つて行かねばならない問題も生じて来るのである。

(b) 子供が産れ始める家庭

新たに親になる夫婦はその家庭の儀礼に対する態度と又或る儀礼とに変化を与える。儀礼は単なる圧迫的なものとか夫婦間の楽しみや間柄を増進すると云つたものに終らずに、自分等の子供に伝達して行かねばならないものとなる。㈠だから此の時代の宗教、休日、家族間の祝い等に関する儀礼は再考慮がなされねばならないので、夫婦間に新しい問題を引き起す事ともなる。特に結婚後充分な準備もない時に子供が生まれて来る様な場合には問題は緊急な事となる。㈡最初の子供の誕生と共に夫婦は子供中心に新しい生活設計を作り出さねばならなくなる。例えば何時、如何に、誰が子供を入浴させ、食事を与え或いは又相手をしてやるか等の儀礼が造られねばならぬ。之は時間的に永く続くものではないが、次々と子供が生まれる時に繰り返えされるものである。㈢中、上層階級の夫婦間には子供が生まれた時父親が母親に祝いの花とか宝石とか其の他の贈物をする儀礼が出来ている。

(c) 就学前の子供のある家庭

これは種々な経験に依つて最も多くの儀礼が造られる時代である。例えば訓育上のことで特に母親が造り出すものとして次のケースが善い一例である。

『デビドは会社から帰ると夕食をすませ、子供等とふざけ廻る事が好きだつた。一日中でその時だけが子供等と一緒の時間であつた。だから此の好機を逸する事は出来なかつた。併し子供達を興奮させて床に就かせないので毎晩大変な問題となつた。デビドは嫌になつて来てニュースでも聞けたらと思う様になつた、併し子供達はだだをこね、さわいで寝ようとはしない。私（母親）は手の出しようもなくなつてしまつた。或る夜、若し子供達が早く寝て呉れるならばと思つて本を読んでやろうと心にきめた。次の夜、子供達がすぐに寝るから本を読んでくれませんかと云い出した。それ以来一番下の子が就学する迄子供を寝かす事には何の問題も起らなかつた。子供達はデビドと一さわぎしてから喜んで寝室に行つた。私が子供の寝室から下にもどつて行くとデビドはラジオのニュースを静かに聞いていた。斯くしてそれ迄の毎晩の苦悩も皆が満足する様に解決された。併し或る晩本を読んでやつたというこの単純な試みが、一つの儀礼となつて行つた。而もその儀礼には時、場所、選定された読み物、其の上、時の経過と共に集積されて行つた多くの小さい慣習、規約、規定等がある。』（一四四頁）

此の時代は経済的には恵まれず、家族は多く、母親は最も多忙を極める時で、家庭の統制の最も取り難い時である。従つて好ましい儀礼を最も必要とする時代である。

(d) テイーンエイジャーの居る家庭

此の時代は所謂潜在期（latency period）で、家庭の儀礼に関しても同様の事が云える。此の時代は子供が家庭から離れて行く時であるから却つて家庭の儀礼が発展させられねばならない次の様な理由がある。(イ)或る点から子供等は成人に近い。(ロ)親は子供等が家庭を敬遠する危険を感ずる。(ハ)異性に対して興味を持ち出す時であるから常に看守する必要がある。

(一)此の時代に子供に成人となる事や責任を取らせる事に関する儀礼を必要とする。例えばデイトに関し、出入口の鍵の使用に関する事等。(二)性別の儀礼が必要となつて来る。例えば女の子供は母、男の子供は父と類似の儀礼を必要として来る。(三)親の側に於ても子の側に於ても一般社会関係から儀礼の必要を認め出して来る。例えば夕食を食堂で正式に頂く様にする。或いは子供の方から之を主張する様になる。(四)各階層の意識が家庭の儀礼を通して表明され出す。特に上流階級の家庭に於ては子供達に関す

る多くの事柄が今迄は召使とか乳母等からなされていたが、直接両親の関心の下になされる様になる。

(e) 子供を送り出す中心としての家庭

親と同じ屋根の下に生活しながら親達と平等で独立の要素を持ち、従つて家庭の儀礼に強いテンションを感じている時代である。故に少くとも自分が家庭を持つて子供が生まれる迄は家庭の儀礼の如きは廃止しようと考えている。特に結婚期を間近にしている女子の場合にそうである。が此の時代に子供達が経済的に独立している場合は却つて親特に母親に贈物を仕返すといつた様な儀礼が出来て来る。

(f) 老令期の家庭

子供達が成長して家に居なくなつた家庭で、全体としては少ないが現代此の種の家庭はその数を増しつつある。此の種の家庭は、(イ)老夫婦が新婚当時の儀礼を盛んにして生活に満足を感じている。(ロ)結婚して各自独立した家庭を持つている子供達が休日等に里帰りする儀礼、及び(ハ)孫との関係に種々な儀礼を新にする時代である。そして此の事は研究されたケースレコードの五割以上の孫達に喜ばれている。

(g) 概念的道具としての家庭の週期

凡ての家庭が必ずしも以上の六つの週期を持つものではなく、或る時はその何れにも適合しないと云う事もある。(一)子供のない家庭は第一の段階のみで其の他は何れにも適合しない事となる。(二)子供はそれぞれ異つた年令層で生まれて来るので時には凡ての段階を一時に現わしている家庭も出来てくる。(三)中年或いは其の後に結婚する親の場合も亦上述の段階に当てはまらない。(四)独身の子供、子供を持つたり持たなかつたりする離婚の者等が同居していると家族も亦同様である。

F 三代に亘る儀礼

此の研究のためアダムスと云う家庭が選ばれている。その理由は次の六つの点からである。(一)其の家庭に種々な儀礼があつてそれは誰にでも識別し得るものである。(二)儀礼に関して人種的な争いや、生れつきの階層或いは又宗教上の争い等で複雑でない

事が解つていた。㈢中流階級である。㈣二代の大人達が何時でも喜んで研究に協力して呉れるし又研究の目的を理解する知識人である。㈤三代目の子供が何時でも観察出来る。㈥此の世紀の変り目に一代目の人々が生れ、二代目は世界第一次大戦の後、三代目は第二次大戦の終りに生まれた三代に亘る家庭である事。

扨て此の家庭の研究には種々な限界がある。㈠一家庭の中であらゆる儀礼が見出される事はむずかしく、更に五十年も前にあつた儀礼を詳細に覚えている事は困難である。㈡此の家庭は一個建の家ではあるが、二つのアパートに分けられ、祖父母と次の世代の親子とは別の生活をしている。従つて其処に事実上継続と云う要素が加わつて来ている。㈢代表的な家庭と云う様なものは考えられない。又家庭の儀礼の興廃の過程と云う事も検討され難い。㈣此の三代に亘る間に発見される儀礼は量的にも質的にも余りに多いので一つの章に納める事は出来難い。

此のアダムスの家庭の研究は、家庭の者が研究の当初の数ケ月間に書いて呉れた儘のものとその後のインタービューを出来るだけ逐語的に記録したものである。分析と比較の目的のために、次の様な段階で記録を書く事にした。㈠各世代の短い家庭的背景。㈡各世代の大人が世代順に選んで書いてくれた儀礼の記事に括弧内に入れた著者の観察と各種の儀礼を書き終る時に書いた短い解説。㈢アダムス家の儀礼の過程の説明。㈣著者の要約。

(a) 家庭の背景

『㈠アダムス氏はアイオア州の農家に生まれ、其処から近所の十室ある家に引越したのは三才の時であつた。十二才になつた時その町の商店街が全焼したので七室の家に移つた。彼の両親は其の家で余生を送つた。二人の姉が居た。アダムス氏は次の様に記述している。

「私の母は結婚前教師をしていたが結婚後は全く家の事やクラブの事で一杯であつた。父は農夫であり、商人(肉の卸売専門)であり、法律の顧問であり又政治家でもあつた。晩年はタイル張の商売を始めた。彼は大きなもぐら掘器を持つていてそれで沼地の排水をするためタイルを地下に埋めた。中年の時代は特に政治に関心を持ち、小役人例えば郡の治安官、警察署長等で満足

していたが、有力な裏幕の人物で、州の政界には極めて有力であつた。」

(B) アダムス夫人はミゾリ州に生まれ、両親の下に十二室のある家で弟と共に大体子供時代を過した。父と二人の子供は此の家で生まれた。彼女の母は几帳面な家庭の主婦で、父は癌の専門医であつた。「父は代々の医者を継いだ人で、末子は今医学校で勉強中だが、私の兄の子供である。」とアダムス夫人は書いている。」

此の二人が結婚して一人の娘を持つた。

(C) ジャニットはフロリダ州キーウエストで生まれ、テネッシーやフイラデルフイアで人生の大部分を送つたが此処彼処と度々移転した。彼女が言うには「一番永く住んだのは八年間であつたが其の家には十一室あり、これ迄も大体この位の借家に住んだ。終いに此の家を買つて今も住んでいるが、此の家ともう一つこれに全く似た家が記憶に特に残つている。」

彼女の母は社会事業家で又教師であつた。父は音楽会でピアノを弾いたり、教えたり、又作曲もしていた。』

(D) トムはジャニットの夫で、メリランド州のボルチモアで十二室のある家に生まれた。母は家庭的な人で、父は技師で又弁護士（技術方面の）であつた。トムが六才の時父は世を去り、母は再婚した。彼には三人の妹がいた。再婚後二人の義弟が生まれた。父が死んだ時迄は祖伯母と祖父母と一諸に生活していた。

ジャニットには二人の子供があり、男の子は三才、女の子は四才であつた。

(E) キャサリンとトミーはペンシルベニヤ州の西フイラデルフイヤに住んでいる。其の家には父母と祖父母とが別々にアパート式な生活をしている。母は比較宗教を教えているが「家庭の妻たる事を強調している。」父は土木技師である。

此の研究に貢献してくれる大人達は皆大学出身である。男は（そして彼等の何代か先の先祖を含めて）或る時は専門或る時は半ば専門の研究に従事し、女は家庭の人か又は専門の仕事を持つている身分の者であつた。男も女も今尚自分の専門の仕事に従事している。彼等は皆可成り大きな家に住み、子供の時代には余り住居を変えなかつた。ただジャニットのみは例外で、彼女は屢々引越したが家の作り方は大体似かよつたものであつた。

(f) 家庭の儀礼

(A) 食事の時間

アダムス氏の記述

我々は一定の時に食事をしたか。その通り。朝食はいつも本当にキチンと七時。と云うのは少しでも遅れると中食に接近して何れの食事も台なしになつてしまうと考えられた。中食は正十二時であつたが学校当局が下校時間を強硬に主張するので幾分余裕を持たせなければならなかつた。夕食は六時で朝食程には厳格でなかつたがそれでもその前後一分間位の余裕しか許されなかつた。私は幼少の頃多少食物に制限を受けていたので夕食は女性達と一緒に四時と五時の間にすませた。そして夜家族の者が集る迄には心地よく寝込んでいた。

家族の者達は常に一緒に食堂で食べた。各自食卓の席が定められていて手伝いの女も一緒だつた。手伝いの仕事の一つは給仕をする事であつたので食事中此処彼処と歩き廻つていた。

肉を切り分けてくれたのは父で、野菜や果物は鉢に入れて廻すことになつていた。母は当時の一般の主婦の役として毎度食器の世話をし、客がある時には客用の皿等を用意した。来客は可成り多かつたが其の場合には手伝いが給仕をし、彼等は台所で食事をした。我々子供達が友達を食事に招く場合には前以つて許しを得ていなければならなかつた。

食事時の話題は大体両親の間では政治やクラブの活動の事であつたが、子供達は全く除外視されはしなかつた。勉強やその他の事に就いて屢々尋ねられたが自分達の方から話し出すという事は殆んどなかつた。

食事の儀礼は夏冬一貫したもので、季節によつて異なるような事は殆んどなかつた。

アダムス夫人の記述

私共は大体七時半、十二時半、六時と定まつた時間に食事をした。両親は各々食卓の反対側に着席した。兄は一方に私はその前に。一家揃つて食堂で食べた。特別製の皿、ナイフ、フォーク、スプーン、コップ等が大きな会食のためにそなえてあつた

が、平素は何時も普通の同じ食器類が使用された。客は何時でも見えた。手伝いが食事を手伝つてくれた。特別な時や家庭の御馳走の時は母が腕を振つて準備してくれたが、特製のビスケットを作つてくれたこともあつた。私も大人になると誕生日等の祝いにはケーキを作つた。父は食卓で肉を切つてくれ、母はデザートを分けてくれた。食卓の話題はその時々に皆が興味のある様なものだつた。

食事の変化と云えばその時々の季節の食物位のもので、非常に暑い時に限つて手伝いにサラダ、圧搾肉、冷いパン（cold bread）、デザート等を作らせ、中食後は自由にしてやり、あとは母と私とで夕食の用意をした。

父が仕事の都合で遅くなつた時以外には夜食はなかつた。その場合には私が何時でも父の帰宅を待つてお世話をした。その様な時父と私とは患者の病状や治療の事等を話し合つた。

ジャニットの記述

父の教える時間の都合により我々の食事には多少早い遅いがあつた。普通は七時半、十二時か一時、六時。土日は父が教会のオーガンを弾かない時は気がむいた時に食事をした。父がオルガンを弾く時でも我々の時間はどうにでもなつた。朝食は遅れ勝ちだつたし、中食は大体正午で、土曜日のランチと日曜日の夕食は一週間の中で一番愉快な時であつた。というのは子供の気持にも胃袋にも気に入るおいしいものが食べられるからであつて、天気のよい時等は時折公園で食べることもあつた。一番好きな土曜日のランチは下町にある父のスタジオでステルノ製のストーブでお茶をわかしながらサンドウイッチを食べる事であつた。

父は上席に着き、母は他の側に、私は又別の側の席に着いた。お客がある場合には母が下の方の席に着いた。食事はよし一人を待つたり、余分の準備をするために予定より遅くなつた場合でも全家族が一緒に頂く事になつていた。食事はいつも食堂でしたが急な場合、土曜日のランチや夕食、或いは又日曜日の夕食等は台所で食べた。

平素は銀鍍金の食器を使つていたが、特別の場合やお客の時には先祖伝来の銀製の食器を使用した。誕生日やクリスマス等には家族のためにもそれを使つた。代々伝つた皿類は独立戦争前のハビランの揃いものであつた。これ等は母方の長女の結婚の時に

次々と伝えて来たものであつた。今は私のものだが、カサリンが結婚する時には渡すべきものである。銀製のお盆等は両方の家庭から伝わつたもので、私の結婚の時、母は祖母の銀製の食器をゆづつてくれ、自分は自分の父の家の食器を用いていた。カサリンは其のうち私共が今使用している一揃いを受け継ぐ事になるであろう。

食事の用意は家中の者が皆でした。両親とも料理が出来、父は男子も料理をしなければならなかつた西部で少年時代を過したので止むをえずやり出したのが病みつきで上達した事を誇りにしている。皆で一緒に準備し、父が食卓で肉を切つてくれた。

食卓では一日の出来事をそれぞれ語り合うのだつたが、その日最も面白い話題を持つていそうな者が最初の発言権を得た。どの話も面白かつたが最も普通の話題は心理、歴史、音楽、文学そして就中人の噂話であつた。家族に関する訓練は非常に行届いていた、即ち先祖の名、紋章、家系、祖先の中で歴史的に有名な人物等々。家族の伝統、地位、躾、外国語で毎日話し合う事等が強調された。夏の生活計画は何時も更にゆつたりしていた。父は常に食前の感謝を献げた。

トムの記述

家族が非常に大勢であつたので食事の時間はきめてなかつた。ただ両親（義父）の席だけはきまつていて、各々上席と末席とに就いた。食堂で食べたが、全家族が一緒に食事をする事は極く稀れであつた。平素の食器と客用とが区別されており、特別な来客のものもあつたが先祖から伝つたものはなかつた。

母と女の子とが食事を作り、来客の時には女中をたのんだ。母が台所で肉を切つて分けてくれた。食卓の話題には特別きまつたものはなかつた。と云うのは母が全くの聾者で父人数も多すぎたからであつた。やり方は夏も冬も変りがなかつた。夜食の欲しい者は勝手に食べた。

子供達（ジャニットによる）の記述

私達は七時、十二時或いは一時と六時とに食事をする。週末と休日とには別に定めた時間はない。食卓の席はきまつている。小さい四角なテーブルに私達は着く。トムが上席、私が末席で小さい子供達が其の間へ。併し長円形のテーブルの時には親と子

とが交互に両側に着席する。お客の場合は一方の側に着いてもらう。（長円形のテーブルは家宝で、子供が小さくて壊わす怖れのある期間中には毎日は使用しない）食事は何時も食堂で一緒に頂く。赤ん坊は座れる様になると食卓に着く。祖先伝来の食器類は特別な場合にだけ用い、普段は日常用のものを使う。皆で食事の仕度をする。幼児でも手伝いの真似をして遊ぶのを喜び、自分のプラスチックの皿は自分でふく。トムが食卓で肉を切る。話題は私自身の家庭の場合と全く同じで、食前の感謝は私がする。夏でもトムの食事の時間は変らないが、子供達と私とは食事がすんでいる時でも私の両親の朝食に加わって話をする。夏にはよく裏のポーチで夕食を頂く。

解　説

アダムス夫妻の食事の儀礼は子供時代から非常に似ていた。時間は定められ、家族全員揃って食卓に着くことに大きな価値を認めて融通性を持たせている。家の者は定まった席に着き、食事の用意は家族のためにも又特別な時のためにも似通った準備がなされ、話題は賑かで家庭的なものであった。此の二人が新家庭を持つ様になった時も儀礼について大した変化はなされなかった。形式は大体同じで、アダムス夫人は主人の便宜上更に融通性を持たせた、と云うのは彼女の父は医者で仕事の関係上時間は不規則であったから。それにしても可成りの変化があった。第一アダムス夫人は妻となり母となっても職業は止めなかった。此の為此の家庭の週末は週間の仕方から特に解放される機会となったので、週末の食事の儀礼は平素と異った特別なものとなった。第二に、ジャニットだけが家に残り、家庭は子供と大人とのレベルの間に何等の目立った不和のないものとなった。食卓の席次は皆が接近して座るように変えられた。話題はアダムス夫人の場合に似て互に興味のあるものであった。而もアダムス氏の場合の様に子供と大人の話題が分けられるような事はなかった。それはいつも一つのものであった。第三に、母親が休暇になり非常にゆとりのある夏のスケデュールになるのは楽しいものであった。食事が食堂以外の場所で出来る事は一層好評であった。第四に、更に一世代を経過したので、一番よい銀の食器は一層大切な家宝となった。食卓では意識的で効果的な努力が払われて祖先及びその名、業跡、伝統等が覚えられた。

トムの食事の儀礼は全く異つたものであつた。彼は或る繁栄しつつある家と姻戚関係になつた。アダムス家の儀礼は優勢でトムは食事の時間、全員の着席、父親が食卓で肉を切つて分ける等の伝統的な仕方を取り入れた。併し多少の変化が加えられた。即ち今迄父親が食前の感謝をして来た家の伝統を廃してジャニットがするようになつた。又のんびりすることの出来る待望の夏の期間、トムの仕事の時間は変らないのでジャニットは子供達と一緒に朝食をすることにしたので朝食時間を不規則なものにする事なしにすんだ。そしてトムが仕事に出かけた後ジャニットや子供達はアダムス家の朝食後の一時にゆつくり加わるようになつた。

家族の者達が互に寄添つて食卓の席に着く習慣も身に着いた。結婚した当初、ジャニットとトムとは隣り同志で食卓に着いた。子供が生まれて来てから彼等は二人の幼児の世話をするため他の工夫をしなければならなかつた。そして長円形の食卓では家族は皆一方の側に、来客は向側に着席するようにした。このように時に応じて便法を講ずるのに何ら妨げがないと同様に家庭内の食卓の席の順序に就いても基本的な意味を持たせる事に何も困る事もなかつた。

此の家族は二つに別れて食事をするが、凡てお祝の時（休日や記念の食事）には何れかのアパートで一緒に食事をし、土曜日のランチは何時もアダムス家の食堂で食べた。

何れの家庭でも召使や使用人との間に階級的な区別をする儀礼はなかつた。又分業に於ても同様であつた。アダムス氏の家庭では来客の時以外は召使も一緒に食事をした。女の子は各自自分達の室を掃除し、小さい男の子でも料理を教わり趣味として上達した事を誇りにしていた。アダムス夫人の家庭にとつて召使は一つの重荷であつた。奴隷解放の時に彼女の家庭（此の家庭は決して人間の売買をしなかつた。併し幾人かは親の代から受け継いで来ていた）は奴隷に対し去ることも又今迄通りの条件で居残ることも自由にした。彼らには給料は支払われなかつたが、多くの者は居残る事を望んだのでそれが今の家庭にとつて取り去り難い重荷となつている。アダムス夫人の母は娘に料理を教えた。彼女の家庭は何回かの食事の給仕は家の者が引受けて召使達を自由にさせてやつた。又アダムス夫人自身祝のケーキを焼く事と父に夜食を出す事とを儀礼とした。トムの家では召使は必要

のある場合には便利なものだと考えていた。それで意識される程の社会階級間の儀礼と云つた様な事は重大なものとはなつていなかつた。斯く此の人々は皆一緒に生活していたので、召使達は日々勤労する少し変り者位に考えられていた。家族の者は彼らと一緒には仂かないが子供達は手伝い遊びをするのが好きであつた。此の共に仂く過程に於て新しい家族形体が生じ、アダムス家の旧いものと統合されている。』（一五七―一六四頁）

著者は以上の様なアプローチで(B)家族の娯楽、(C)就床、(D)外出、(E)躾、(F)休暇（(G)は無し）(H)名付、(I)宗教儀式、(J)旗日の儀礼等に就いて十八頁の紙面を費している。其の間には種々有益な内容もあるが割愛する事とする。著者は其の章の要約を以つて終る前にアダムス家の儀礼が三代に亘つて継続されて来ている要因として次の点を指摘している。

(一)アダムス夫人の方の家族に在る強い伝統的母主性。(二)母主性の伝統は家庭の形体や慣習の持続に関して意識的責任を含む。(三)永続は有形の物（家宝）によつて容易になされた。(四)儀礼（例えば歌、文献、ゲーム等）の多くの無形の内容は文化的に永続し得るものである。(五)アダムス夫人とジャニットの両名とも一人娘であつた。(六)此の家庭で選ばれた配偶者のタイプが儀礼を強化するのに役立つた。(七)儀礼に反抗する様な機会が与えられなかつた。

G　家庭の儀礼と家庭の融合（Integration）

第九章は本書の結論で、其の初めに次の様に書かれている。

『此の章は今回の研究の結論の主な面を総合し、それを家庭生活に於ける儀礼の総体的重要さに関する一つの論文にまとめようとするものである。』（一八六頁）

(a)　儀礼と人間関係

『我々の素材に一貫しているのは次の事実である。即ち儀礼と云うものは家庭集団の各員の為めに調整された人間関係の一形体である。此の人間関係の一様化は国の祭日とか家庭的祝日に家族全員を包含する事が出来る。我々の研究の中に見られる大多数の儀礼はこの種のもので、家族全員の協力を期待し又一般には協力を得ている。』（一八八頁）

併し儀礼は結婚したばかりの夫婦間の様な個人間にも出来て来る。例えばブレット夫妻のトランプ遊びのクリビジが彼等の性生活の調整の儀礼となつた如きものである。更に父親対娘、母親対息子等の儀礼も多い。

『我々のケース記録に書かれている人間関係を熟慮して見るに此の行動の一様化に如何なる事が起つただろうか。次の四つの点を確認する事が出来る。㈠人間関係に関する強い継続の意味がある。当事者間の予想は或る一定の間隔を置いて繰返しながら其の関係が継続して行く事である。㈡其の関係は標準化され、一つのすり減つた岩の様に時の経過と共に益々なめらかになつて来る。既定の形と其の帰結があつて、各々の段階は云わば時間表の如き正確さで次々と行われて行く。行動は予想のつくものとなる。従つて関係は容易で気持のよいものとなる。㈢其の関係は魅力化される。それを興味深いものにする努力がなされ、然も既々印象的に。其の関係にあるものは「我々のやつている事は好きだ、我々はこれを上手に又愉快にやりたい」と云う様である。㈣儀礼が出来、継続されて行く事は人間関係を深めるように思われる。例えばダンラップは最近儀礼の役割に就いて次の如く書いている。「儀礼が信仰からと云うよりも寧ろ信仰は儀礼から起つて来る。儀礼から信仰への発展は儀礼の解釈、而も更に深く進んで種々な解釈がされて来るにつれて、明白に儀礼が集団の産物であると云う事実と一致して来る。』(一九一頁)

(b) 儀礼と家庭に対する文化的アプローチ

『儀礼は人間関係の型以上のものである。儀礼は一つの目的を持つている仕方である。それは思考や行為の承認された方法である。だから文化を意味する。

人間は家庭の内情をよく理解して来るにつれて家庭とは単に相互的に行動している人間の集団ではない事が解るばかりではなく、各家庭は各々独自の生活様式を持つている事に気が付く。』(一九一頁) これが家庭文化と云うもので、家庭生活のあらゆる方面に行き亘つている。キムボル・ヤングは儀礼は文化類型の中核であると云つている。儀礼こそは家庭文化の中核である事を著者も強調している。

(c) 家庭の一致、固定及退歩の過程

人間は結婚で種々異つた家庭の儀礼に従わねばならない事が起つて来る。特に階層其の他の異つた家庭環境に育つた者の間に於る場合にそうである。次のケースは此の様な場合の問題の所在を示すものである。

『ローラは私達と同じ様な家庭環境と経済状態の中で育つた少女であるが、赤子の時に母を失い、その後父が死ぬる迄茫然自失に陥つていた間に雇われた家政婦に育てられた。私（此のケースの筆者）はこの「貴婦人」を非常によく知つていた。彼女は所謂雇われ家政婦のタイプで此の家の主人と結婚する事を唯一の目的としていた。併し此の難事を乗り切る事が出来なかつた。主な理由は主人がいつも目失状態にあつたからだ。彼女は家庭を融和させる努力は少しもしようとはせず、ただ自分の首をつなぐために必要な雑事のみをした、そして主人には注意を集中した。家庭的儀礼等は全くなかつた。家庭はとても落ち着ける所ではなかつた。ローラの家庭生活は全く異質的なものであつたが、勿論私達と共に私立学校へやられた。彼女は柔しい人の心を引く少女であつた。私達は彼女を愛し又気の毒に思つた。彼女は私達や家庭に興味を引かれていた。高校時代には、私達の楽しい十人の仲間に入ろうとし、我々の仲間の誰かが一緒でないと洋服すら買おうとしなかつた。ローラの様子がよくなつて来たのを見ると私達はかなりスマートであつたらしい。私達は彼女のために私達のサークルからデイトの相手をさがしてやつた。というのは彼女がつき合つていた少年達には好意が持てなかつたからである。ローラは私達のボーイフレンドの態度が好きで、理想視していたが、他の少年達の間でも人気があつた。さて大学卒業後、彼女はあこがれの一青年と恋愛し、妊娠した。彼は非常に騎士道的で彼女とかけ落ちした。彼女の子供は死んだ。それから数ケ月して私の処へ話に来た。私の日記をみると、彼女から直接聞いた話はこうであつた。

（二人の間に）凡ての事は夫ビルの為にと云う習慣があつた。毎日曜、二人は夫の両親の家庭で肉料理付のお茶を飲み「息づまつて」過さなければならなかつた。彼女のノートには夫の家族全員の記念日を記し、それにふさわしい贈物をしなければならなかつた。又休日はいつでも「興奮」の日で特定な事をして彼の親類とつき合わねばならなかつた。彼女がたまゝ夕方近く出かけて帰り、夕食のテーブルにあわてゝテーブルクロスの代りにテーブルマットをおいたりすると、ビルはこれは朝食か夕食か

等と聞いたりした。二人の夫婦生活は理想的には違いないが、もうこれ以上こんな生活には耐えられないとも云つた。彼女はちつ息しそうだつた。私には何の事か解らなかつたし、又誰もどうする事も出来ない様に思われた。ビルはフランクと私とに相談に来たが、その後すぐに二人は離婚した。ビルはローラを讃めちぎり、而も彼も又何が何かさつぱり解らずにいた。その時私達二人は、ローラが子供を失つた事から一種の精神病になつたのではなかろうかと思つたりした。兎に角ローラは二年後にオーストリア系ユダヤ人と結婚した。彼はアメリカ人になり度いと希望して自分の家族から完全に離れてしまつた。私は彼を知つているし又好きだが、彼の家庭生活に就いては、彼がそれをすつかり捨てゝしまつたと云う事以外は殆んど何も知らない。彼等二人は私達の高校時代の十人仲間の生活水準から見れば途方もないような生活振りで、常にふざけた批評をあびせられている。又決して何一つ公正にはしていないし、彼らの生活は非常に風変りで全くでたらめである。併し一九三九年以来の二人は現在迄本当に幸福なのである。近頃は、晩年になつて二人は幼児二人を養子にもらう事を考えている。友人達はその考えにゾッとしているらしいが、私にはそれ程にも考えられない。』（一九三―一九五頁）

此のケースから理解出来る事は、ローラの最初の夫ビルの儀礼的固定、それに対照的な第二の夫ユダヤ人の儀礼的退歩、更に全く儀礼の無い家庭に育つたローラの此の二人との結婚生活の不和と一致とである。併し儀礼の退歩による一致は正常の家庭生活とは云えない性質の一致である事を此のケースは示している。此処に於て著者は次の如く書いている。

『子供や青年が成育する時の儀礼的背景の役割や其の後結婚した後の事を研究しようとする場合、我々は必ず行為の基礎になつて来ている固定や退歩の過程を考えさせられる。』（一九五頁）

固定や退歩の過程は人間の成長期に何時でも起る事であるのは心理学が明らかにする所であるが、我々は特に種々な儀礼との関係に於て考え、先ず次の如き極めて一般的ではあるが本質的な概念規定を与え得ると思う。『種々な社会的発展の段階を経過して行く普通の人間は其の発展段階の初期に於ける体験や状況に強い愛着を示すものだが、其の愛着の力は其の体験や状況から満足を得る度合によつて異る。』（一九六頁）此の固定や退歩の過程は現実には個人々々の行動形式として常に見られる事で、例

えば子供が青春期に達すれば或る事に満足を感じ又其の事の達成に適当な手段として青春期の行動形式を取り入れると云つたような事である。此の研究のデイタから我々は此の概念が大学の在学生及卒業生の生活の中に具体的に起つてきた事を次の如く要約する事が出来る。㈠大部分の家庭の儀礼は子供が生れ、子供を中心に出来て来る。㈡多くの儀礼は生々した印象を必ず子供達に与える。㈢凡てとは行かなくとも多くの家庭の儀礼は楽しい連想となつている。例えば祭日とか誕生日等の楽しい時。㈣人が家庭を去つて行く時、変化のための大部分の再調整は結局儀礼的行為に於てである。新夫婦は各々自分の側の家庭の儀礼を持ちよつて新家庭を造る。㈤自分の家庭の或る儀礼が楽しいものであつた場合それは固定する。其の後家庭を去り自分で新家庭を作つた場合にも子供の時の経験が非常にやつて見たくなるものである。

(d) 家庭の儀礼と家庭の融和

家庭の融和とは何を意味するか。『「融和する」と云う言葉は一緒にし、そして総体的なものにする事を意味する。我々は「家庭の融和」と云う表現を、種々異つた要素の復合的総体或いは調和のある関係への溶接又は総合を意味するものとして使用する。融和のある家庭とはがつしりした家庭、強い継続的絆で結び合わされ、一つのものとして円滑に機能を発揮しているものである。若し人が其の家庭の融和を発生論的言い方で理解しようとするならば、其の融和性を確認する為に用いられる多くの指針となるものがある。此の指針には共通の問題に対する効果的解決、重大な危機に打勝つ能力、機能の円滑さ、緊張や競いの欠乏、家庭の誇り、家庭の協力と継続の標準、家庭の計画の継続等を含む。過程と云う立場から考える時、家庭の融和は道徳的目的とか文化的価値とは無関係である。或る融和のとれた家庭が他の家庭と反目し合つている事がこれを示す』(一九九―二〇〇頁)

儀礼は先ず家庭生活に於て多くの事を指示し又多くの目的に役立つている。善く確立されている儀礼が存在することはその家族間に可成りの類似性のある事を意味する。次に儀礼は協力の下に出来上つて来るが此の事は集団意識、更に親密感、生々した満足感を与え刺激を与える事を意味する。第三に祝を一緒にするので家庭的誇りに寄与する正義感を伴うものである。第四に儀礼は生活の浄化を含み、それに対する共通の関心を起させる事になる。最後に、家族の行為を統制する手段として屢々役に立

つものである。

此の章を終るに当り著者は次の様に書いている『儀礼は其の内容が人に訴えるもので、而も暗明に役立てられゝば家庭の融和に有力且つ建設的武器となる。悪用される儀礼即ち善い儀礼でも悪用される場合には不統合の機関となるかも知れない。これは多分我々の一般化と其の例外との両者を説明するのに役立つであろう。』(二〇二頁)

三、結び

著者は第九章で論述を結論づけ、最後の第十章は『家庭生活の研究、方法論的補遺』として此の独創的研究が如何なる方法でなされたか、又如何なる困難が伏在するかを明らかにして学徒の参考に資せんとしているので学徒が読んで大いに稗益すべき一章であると思う。

家庭は人間集団の極小のもので、クウリーは第一集団と呼んでいる。『人間関係の問題や原理で一つの大きな家族の範囲内に発見されないものは何もないであろう。』(二〇五頁) 従つて今日の社会の多くの問題は家庭の問題へと還元され、逆に家庭の問題は社会問題として拡大再出現するものだと著者は一応考えているようである。前述の通り今日の大きな社会問題の一つは青少年の非行の問題である。これが家庭の問題として還元される事は誰でも肯定するであろうが、バアサードが取り組んだ家庭の儀礼との関連に於て之を新たな問題となし得ないであろうか。別言すれば、儀礼なるプリズムを通して非行の問題の性質をより正確に把握し得ないものであろうか。例えば昭和二十六年に家庭裁判所が非行少女八九七名を対象に『環境より見たる不良化要因』の研究論題の項目である 余暇の利用」「家庭の娯楽」「家庭内の規律」その他諸項目は殆んど凡て儀礼との関連に於て分析し得る内容と云えよう。此の中、余暇の利用 の項目中「不健全な遊びにふける」が三二・二%、「余暇を上手に利用している」が〇%、更に「家庭の娯楽」の項目で「娯楽に関心はあるが充分に恵まれていない」が三二・二%、「健全な娯楽を家族がそろつて楽しむ」が〇%となつている。「家庭内の規律」の項目の中で「殆んど規律らしいものが無く、正しい躾はみられない」が一九・三%、又「両親の考えが違うため一貫していない」が三二・二%である。「家に対する態度」の項目では「家がいやである」が二二・五%、「家庭に対して何となく親しみを感じない」が二五・八%となつている。

更に昭和二十九年に発表された東京、茨城、鹿児島の中央児童相談所の発表による非行少年百五十名の家庭環境を見た時、

『離婚、別居」からの者が三十六人、「親の死亡」からが五十人、「両親の不和」が十八人、「普通」からが二十八人となつている。此処に注意を引かれるのは、最後の普通の家庭からの者が其の他「父の長期不在」とか「私生児」等の悪条件の場合より多い点である。又司法研究報告書第六輯第四号に見る未成年者の非行の原因に就ての統計を総括して見れば、保護者の放任が「甘い躾」の約十倍、「厳格すぎる躾」の約三十五倍となり、実の両親が揃つている場合(五七%)の方が片親も両親も無い家庭(四三%)より多くの非行青少年を出していると云う結果になつている。此の様な事実には今後更に深く検討さる可き問題の潜在を見ざるを得ない。原子時代の今日、放射能の害毒が探知されねばならないと同様、所謂「普通」の核家庭(Nuclear family)の中にガイガーカウンターの如き何らかの探知器を以つて問題の伏在をより早く知る一方、問題を孕ませぬ様積極的にレイダーでも設ける必要はないだろうか?

此の書に関する批評は紙面の都合上割愛せざるを得ないが、敢て一言すれば研究のデイタが米国の中階層以上のものが大部分であり、従つて極めて複雑な家族生活の内容を持つ米国の家庭文化の交錯断面の重要性は此の研究に用いたデイタと其の分析とでは埒外に置き去りにされている事となるのである。例えば非行少年を多く出す下層の家庭の包含率は極めて底く、又移民やニグロの家庭は各々異つた家庭文化の背景を持つている筈であるが、此の様な家庭の儀礼は度外視されている。更に儀礼の地域的一様化を指摘する場合、サムナーが論ずる慣習(Folkways)との関係にも言及すべきではなかつただろうか。だが著者が第十章の初頭に次の如きスペンサーの言葉を引用している事を忘れ得ない限り、此の様な批評も却つて嘲笑の種を蒔く以外に意味を持たない事になるであろう事を恐れる。

『社会学に関わる諸概念は、他の諸科学のもの以上に複雑である。故にそれに相対応する複雑性を理解する能力を欠けば其の概念は把握されない。だが此処でも他の場合同様、適当に複雑性を理解する能力を欠くと云う事は、無能を少しでも意識する様になると云う事ではない。寧ろ我々が悟らされる事は次の事である。即ち要求されている様な知識的把握の欠如こそは社会学上の問題に対する判断の極端な自信を持つ様になり、而も永い間の研究の後、当然理解さるべき事を理解し、しかも尚それを正しく理解する事は如何に困難であるかを了解し始めた人の冷笑を受ける事になると云う事である。』(二〇四頁)